

# 金沢の夜を彩る賑わいの創出

金澤月見光路 石川県金沢市 川崎寧史研究室

# 学生による学生アパート改修

RDAプロジェクト 石川県野々市市 宮下智裕研究室

# 能登の限界集落に風穴をあける

しお・CAFE 石川県珠洲市 竹内申一研究室

金沢工業大学 環境・建築学部建築デザイン学科

文／小田道子（都市建築編集研究所）

## 「小さな試みからのスタート」

2015年3月、北陸新幹線が開業し、東京・金沢間が最速2時間28分で結ばれた。JR金沢駅は中心街である香林坊・広坂・堅町界隈から離れているため、これまでやや印象が薄かったが、現在では周辺に高層

のホテルやマンションが建ち並び、多くの観光客で賑わっている。

川崎寧史教授が金沢工業大学に赴任した15年ほど前、広坂にあった県庁や金沢大学附属中学校・小学校・幼稚園が移転することになり、商店街の人たちは街がどんどん空洞化していくという危機感を感じていたそう。その金沢大学附属施設の跡地に2004年オープンしたのが「金沢21世紀

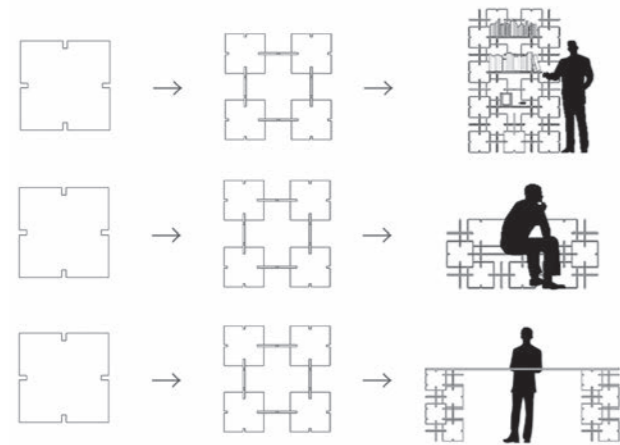
美術館」（設計＝SANAA）であり、旧石川県庁跡地には2010年に「石川県政記念しいのき迎賓館」（原設計＝矢橋賢吉）が誕生した。旧県庁舎建物の道路側半分と推定樹齢300年という堂型のしいのきを保存し、金沢城公園側にはガラス張りの建物を増築、総合観光案内やレストラン、カフェ、ギャラリーなどの交流空間を備えた施設である。近くには「石川四高記念文化交流館（旧第四高等学校本館／重要文化財）」（設計＝山口半六、久留正道）があり、金沢城周辺も菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓などを復元し公園として再整備された。さらに21世紀美術館から兼六園へと、金沢は街の中心部に何ともうらやましい緑豊かな歴史・文化空間が広がっている。こうして都市空間整備が時間をかけて着実に進められる一方で、商店街の人たちも広坂界隈活性化のためにさまざまな試みを重ねてきた。そのひとつが2004年に始まった「金澤月見光路」である。夜の早い金沢に、夜の賑わいをつくり出すのが目的だ。

もともとは、当時金沢工業大学教授で照明工学が専門の金谷末子氏が中心となって、学生がデザインした灯具を広坂商店街の店頭に表示する、という試みだった。創業200年を超える漆器の老舗のショーウィンドウに学生たちの創作灯具が並ぶという、学生にとっては願ってもない経験である。この小さなエリアにももされた小さな一灯が、翌年、ライトアップ企画「月見光路」へとつながった。

当初は金沢工業大学、金沢中心商店街まちづくり協議会、広坂振興会が主催し、大学はデザイン制作と設置を行い、地域は場



金澤月見光路2014。メイン会場の香林坊アトリオ前広場



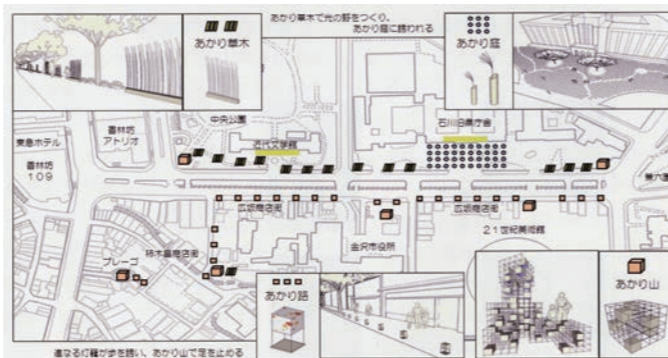
正方形の板を組み合わせて成り立つ構造体



つきみ cafe/bar (2014年)



月見光路 2010年度の広坂地区マスタープラン



月見光路 2004年度の広坂地区マスタープラン



緑豊かな金沢城公園\*



石川県政記念 しいのき迎賓館。旧県庁を保存した外観と堂型のしいのき。反対側の面にガラス張りの増築部分がある\*



金沢21世紀美術館。ここを目当てに訪れる観光客も多く、今や金沢観光の目玉のひとつだ\*





中央が金沢工業大学メインキャンパス。川を挟んだ手前に2階建の学生アパートが並んでいる。最近では4、5階建のマンション形式のアパートも増えてきた



上写真2点／あかりオブジェ「ほしあかり」(2014年)



サイガワあかりテラス(2014年)



タテマチアート(2014年)



線織面と映像による空間インスタレーション(広坂、2009年)

所の提供や調整を行う協働体制でスタートした。その後、まちづくりNPO法人趣都金澤や金沢青年会議所との協働体制がとられ、2009年からは金沢市との連携事業として行われるようになり、翌2010年には月見光路実行委員会が発足した。また、2009年には広坂地区から活動範囲を広げ、金沢中心部の5つの商店街(広坂・香林坊・片町・堅町・柿木島)で実施されることになった。堅町ではベンチに灯りボックスを設置した、昼夜楽しむことができる灯りの家具を制作した。そして翌年「タテマチアート」がスタートした。

### 「COC事業」「空間デザイン研究」

川崎教授は「金沢工業大学月見光路プロジェクト」に当初より関わり、2009年から代表を務めている。プロジェクトはエリアや展示規模を徐々に拡大し、灯りと音楽さらには食を楽しむイベントへと発展した。また、金沢に限定することなく、2010年には能登町で「光のフェスタ2010」、2012年3月11日には宮城県石巻市尾崎

地区で行われた「東日本大震災一周忌慰霊祭」に参加し、長面湾に運をかたどった「花あかり」を浮かべて、鎮魂の祈りを捧げた。学生たちの手作りの灯りオブジェは、現在までに約30種類、3,000個が制作された。「最近では企業とも連携して紙のように薄いLEDシートを使ったり、太陽エネルギー利用などの実験も行っている。電気先生、映像の先生たちとも協働し、いろいろやってみることで街を活性化する」(川崎先生)

金沢工業大学では「自ら考え行動する技術者」を育てるための課外活動として、自ら目標を設定し活動する「KITオナーズプログラム」を実施している。プログラムは学科・課程・研究室に関するもの、産学連携、地域連携など7種類があり、そのひとつが「COC地域志向プログラム」である。これは「学生が主体となり、地域社会におけるイノベーション創出に取り組む教育研究プロジェクト」で、平成26年度には川崎先生たちがこれまで継続してきた一連の活動を統合するカタチで、COC事業「空間デザイン研究」として実施された。

「金沢月見光路」の活動は今年12年目を迎えた。大学がこうした地域活動を10年以上も継続させるのは簡単なことではない。「事故が起きないように細心の注意を払っている。そうやって街の人たちから得た信頼を大切に、学生たちが活動する場を支えていきたい」(川崎先生)。川崎先生によると、学生が地域活動をするときには、どういった学生がいつ、どこで活動する、と学内の部署に連絡すると、最低限の保険を掛けてくれるそうだ。大学が学生たちが地域で活動することを積極的に支援しているのである。

### 「大学指定アパートのリノベーション」

金沢工業大学工学部機械工学科および電気工学科が開学したのは1965年。メインキャンパスは、金沢市に隣接する石川県野々市市にある。キャンパスの設計は、丹下健三の高弟で当時東京大学工学部都市工学科の助教授だった大谷幸夫が手がけ、1967年から2000年にかけて、4期に分けて建設された。開学当時、既存の高専校舎がある以外は周辺はほとんど農地だったそうだ。現在のキャンパスは、東京大学建築学科、東京藝術大学大学院(建築学)を修了後大谷研究室を経て、金沢工業大学の教授を長く務めた水野一郎氏らによる中高層棟群が隣区に建ち拡大したが、大谷の設計意図は大学によってきちんと維持され、風格を漂わせている。企画部広報課長の志鷹英男氏によれば、海外からわざわざ大谷建築を見学に来る建築学生たちがいるそうだ。

野々市市は、全国の市を対象とした2012年度版「住みよさランキング」(東洋経済新報社)で2位に選ばれている。その高評価の理由のひとつは、20歳前後の人口が突出して多いことである。現在、金沢工大には約1万人の学生がいるが、出身地を見ると北陸3県が約4割、残りの約6割は中部地方や関西などから来ている。大学は開学当初、単に賃貸しをするだけではなく親代わりになってくれる大家さんたちを集めて「KIT(Kanazawa Institute of Technology)指定アパート」として建設を依



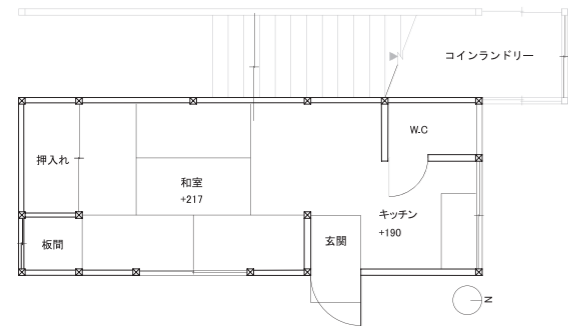
右写真「JR金沢駅」もてなシドーム(鼓門)は観光客の記念撮影スポットになっている\*  
左写真「金沢工業大学メディア情報学科出原電子研究室が中心となり、同大学COC事業「空間デザイン研究」として行われた(鼓門)プロジェクト・マッピング(2014年10月11・12日)



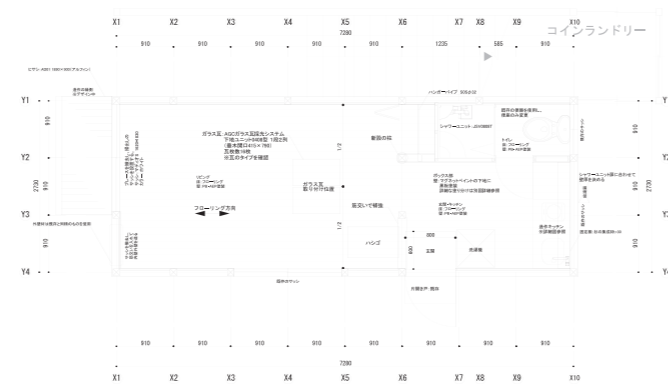




「ひまわりアパート」のリノベーション (2010年)



既存平面図



「ひまわりアパート」の1室 リノベーション後の平面図 1/120



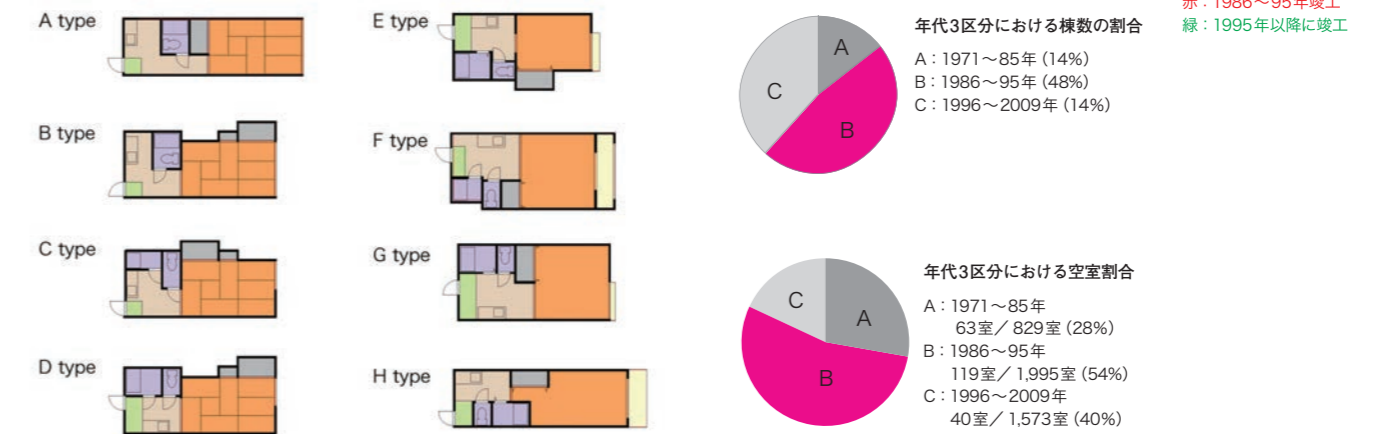
「イーグルハウス」のリノベーション (2010年)  
かつて大家さんが事務室として使っていたスペースを、植物が好きな学生のための住まいに。プランターを置けるように出窓をつくった

トで1室ずつ、リノベーションを完成させた。  
宮下先生がこの R D A (Red Design Apartment) プロジェクトをスタートするに当たり、最初に決めていたことは、費用は大家さんに出してもらい、それを家賃で回収する、ということだ。「大学がお金を出し



KIT 指定アパート分布図

青：1986年以前に竣工  
赤：1986～95年竣工  
緑：1995年以降に竣工



調査の結果、「KIT 指定アパート」の間取りはほぼ8パターンに分類できることがわかった

頼した。宮下智裕准教授によると、現在、大学周辺だけで「指定アパート」の部屋数は約4,500室あり、その約半数が1985～95年の10年間に建設されたものだという。それが老朽化して大規模改修が必要になり、また近年、ハウスメーカーなどが学生をターゲットとしたワンルームマンションなども建設し、「指定アパート」の大家さんたちを悩ませていた。これらの同時期につくられたアパートは、間取りやデザインも画一的で、学生にとっては選択肢が限られているという問題もあった。

調査して驚いたのは、アパートに通常入っているキッチンユニットは何年かごとに取り替えられていたが、デザインは基本的に15年間変わっていないということだった。「時代から完全に打ち捨てられたデザイン部門だった。ワンルームの中でキッチンが一番大きな家具。そこに安ければいいみたいな15年前のデザインが入っていることがおかしい」(宮下先生)。さらにリサーチすると、「風呂に湯を張るのは年に2度か3度」という学生がいた。自分一人だけのためにお湯をいっぱいにするのもつたいないし、ほぼ正方形の湯船に膝を抱えて入っても、入った気がしない、というのだ。「そんな風呂ならつくるのをやめましょう。リノベーションなので部屋の広さは変えられないから、その分収納を大きくするなり、彼らが求めているものをつくったほうが絶対にいい」という話からスタートした」(宮下先生)。

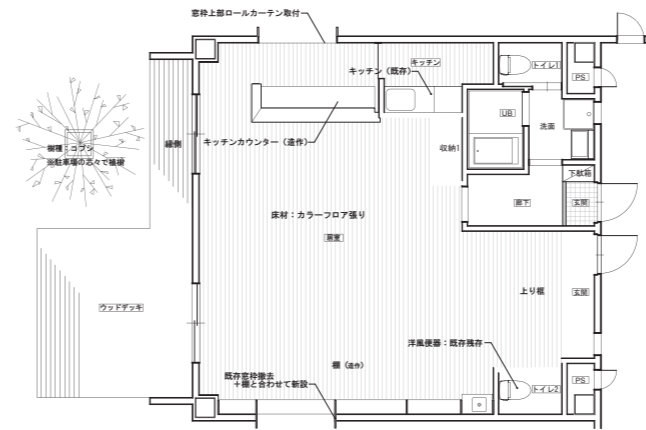
「バス・トイレ付き」を伝家の宝刀のように考えていた大家さんにとっては、一番抵抗が大きいところだったが、喧々囂々、1年間粘り強く話し合いを続け、まず2軒のアパー



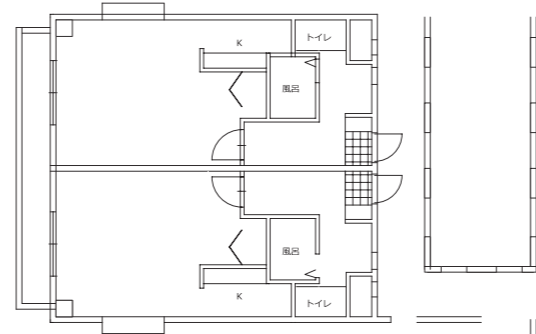
石川県珠洲市片岩地区。このなかの民家をリノベーションして「しお・CAFE」がオープンした



前面の海と背後の裏山の風景を結ぶ「風穴」が開けられている



おはな食堂 (改修後) 1/160



既存平面図 1/200



2室を1つにしてつくった「おはな食堂」(2012年)

て大家さんによってもらうなら簡単だろうが、それでは絶対に回っていかない(宮下先生)。最初は本当にハードルが高く苦労したが、6年目を迎えた今、宮下研究室では1年に3、4件、リノベーションを手がけている。2室を1つにして食堂をつくった例や、時には新築も頼まれるようになった。

プロジェクトの流れは、4、5月に大家さんとの顔合わせ、6月に研究室内のコンペを行い、7月頃大家さんにプレゼン、決定案を7、8月に再検討し、9月に見積もり調整と確認申請の手続き、10月には着工し、何かなんでも翌年2月までには竣工させる。そうしないと、大家さんにとっては1年間、部屋が空いてしまうからだ。プロの建築家ともコラボレーションし、施工会社にはプロジェクトの主旨を説明して理解を得た上で、

### 「限界集落活性化」

学生が行う実務レベルの設計作業についてアドバイスやフォローをしてもらったり、実際に工事に学生が参加する機会をつくってもらうなど、実践的な現場レベルでの指導をお願いしている。現在3社の参画を得て、なかには金沢工大OBの現場監督に指導してもらったケースもあるようだ。

リノベーションしたアパートには宮下研の学生がだいたい一人ずつくらい住んでいて、建築に馴染みのない学生たちに対して、楽しい住まい方のリーダー的な役割も果たしている。

竹内申一研究室は2011年にスタートした「香林坊ルネサンス事業」に参加し、金沢が元気だった昭和30年代の香林坊のジオラマ製作に関わったが、当初は学生たちのモチベーションを上げるのが大変だったという。「ジオラマを見たお年寄りたちが懐かしそうに話をしているのを見て、やっと自分たちのやったことの意味がわかったようだ(竹内先生)。誰かが喜んでくれる……、それは建築学生にとって建築に取り組み大きな力になる。竹内研究室が石川県珠洲市・能登半島で取り組んだ「しお・CAFE」もそんなプロジェクトだった。

「しお・CAFE」のクライアントである株式会社Ante(アンテ)は石川県の特産物を使った食品をプロデュースし、販売している。塩を使ったサイダーやゼリーが好評で、珠洲の揚げ浜塩をもっと広めるために能登に拠点をつくりたい、と相談があった。塩田の近くにつくりたい、とクライアント

トがいろいろ探したところ、外浦の鞍崎海岸に面した集落の建物を譲ってもらえることになった。輪島から向かうと、世界農業遺産の「白米千枚田」、最近の朝ドラでも知られるようになった揚げ浜塩田など、多くの観光客が訪れるその先、バスが1時間に

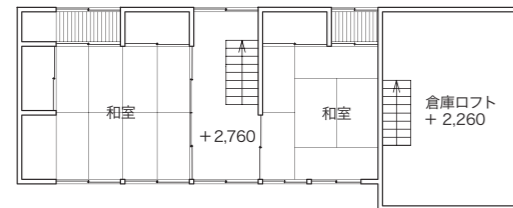


北陸新幹線開業に向けた「香林坊ルネサンス事業」の一環として、金沢美術大学、香林工業大学、金沢学院大学、金城大学短期大学の先生と学生、大学生、大学院生たちが、昭和30年代後半の金沢中心街の香林坊・整町界隈の賑わいを再現したジオラマを製作した。竹内申一研究室は、日銀金沢支店から旧大和まで、旧映画館街や裏通りを含めた香林坊全体の街並みを100分の1模型で制作した

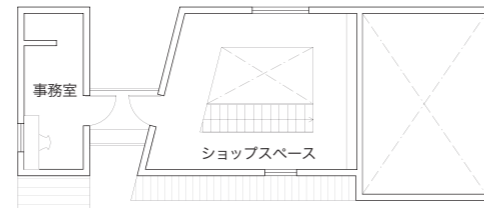




1階客席。吹抜けをもった大らかなインテリア



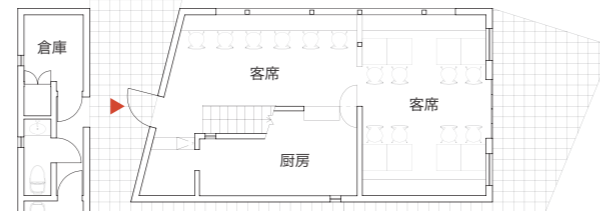
2階平面図



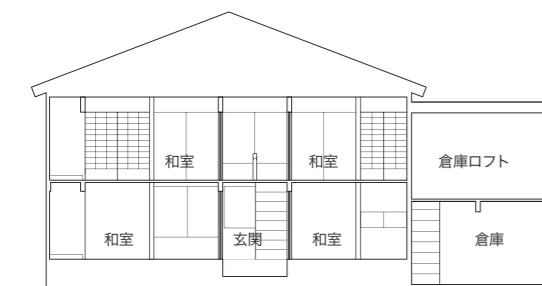
2階平面図



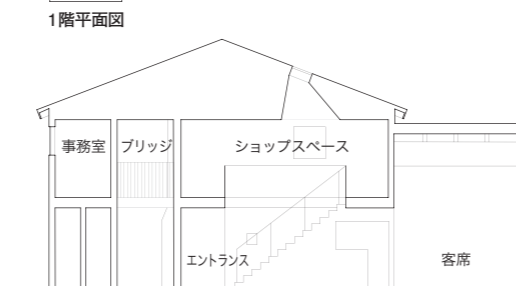
1階平面図



1階平面図



既存建物 断面図 1/200



しお・CAFE (改修後) 断面図 1/200



既存建物。強い海風をよけるためか、窓は小さいつくり



2階吹抜けのショップスペース



テラス



外壁はこの土地特有の仕上げ「杉板下見張り+ポリカ波板（波や風から杉板を保護する）」を踏襲している。「風穴」部分には鈍く光を反射するアルミパネルが張られている







金沢工業大学メインキャンパス。正面はライブラリー棟\*



建築デザイン学科が入っている2号館\*

### 金沢工業大学環境・建築学部

#### 建築デザイン学科教授



#### 川崎 寧史 (かわさき・やすし)

1963年 京都府に生まれる。大阪大学工学部卒業。大阪大学大学院修士課程修了、京都大学大学院博士課程中退、大阪大学助手、京都大学大学院助手、ハーバード大学大学院客員研究員を経て、2001年 金沢工業学助教授就任。2011年より現職。専門は建築計画学、都市・空間デザイン。主な著書に「テキスト建築計画」(学芸出版、2010)、「かたち・機能のデザイン事典」(丸善出版、2011)、「かたち創造の百科事典」(丸善出版、2012)など。2007年度日本建築学会北陸支部北陸建築文化賞(業績)、2009年度グッドデザイン賞(社会領域 まちづくり・地域づくり)、平成25年度金沢市文化活動賞受賞。

これまで、京都・大阪・ボストンなど歴史の深い街で暮らしてきました。その意味で、城下町金沢での教育・研究活動や生活に満足しています。月見光路プロジェクト等を通じてますます金沢に愛着を感じています。金沢の街や自然、人と触れ合いながらデザイン制作に汗を流す毎日です。

#### 建築デザイン学科准教授

#### 竹内申一 (たけうち・しんいち)

1968年 愛知県生まれ。1990年 東京藝術大学美術学部建築科卒業。1992年 東京藝術大学大学院美術研究科修士課程(建築学)修了。1993～2004年 伊東豊雄建築設計事務所。2005年 竹内申一建築設計事務所設立。2011年 金沢工業大学建築デザイン学科准教授。SDレビュー 1991入選、2009年 JIA 建築家のあかりコンペ優秀賞、2010年くまもとアートポリス球磨工業高校管理棟コンペティション佳作。

プロジェクトに取り組むとき、学生には最初に、個人の作品ではなく、あくまでも竹内研究室としての作品だから、自分のものだと思うな、と釘を刺します。人の考えを自分で発展させる、あるいは自分のアイデアを他の人に明け渡すことも必要です。そういう意味では小さな設計事務所かもしれません。



#### 建築デザイン学科准教授

#### 宮下 智裕 (みやした・ともひろ)

1968年 静岡県生まれ。1993年 芝浦工業大学建築工学科を卒業後、同大学院工学研究科修士課程修了。1997年 南カリフォルニア建築大学 (SCI-Arc) 大学院修士課程修了。1999年 芝浦工業大学大学院博士課程工学研究科修了。2007年 金沢工業大学環境・建築学部建築デザイン学科准教授。日本建築学会北陸建築文化賞(2007)、グッドデザイン賞(2009)、金沢市都市美文化賞(2009)、Low Carbon Life-design Award 2009「環境大臣賞」、IES ILLUMINATION AWARDS(2010)、(社)アルミニウム協会賞「開発賞」(2010)、第4回サステナブル住宅賞優秀賞(2011)、第11回JIA環境建築賞入賞(2011)受賞。

学生にとって一人暮らしを始めるのは、大きなターニングポイントだと思います。初めて現実を突きつけられて、そのなかで社会にコミットメントする一瞬であるはず。特に建築を学ぶ学生にとっては、自分の住環境について考え、住んで検証する重要なチャンスです。学生と大家さん、工務店がウインウインになるような、そういう継続するリノベーション・モデルがつかれないかと考えています。



野々市の旧街道沿いの街並み。重要文化財に指定されている「喜多家住宅」や野々市市郷土資料館になっている「旧魚住家住宅」などがある。この地区も住民の高齢化などの問題を抱えている\*

撮影：池田ひらく(112頁下、114・115頁)  
資料提供：金沢工業大学企画部広報課、川崎寧史研究室  
\*印：都市建築編集研究所

ているとしても、それさえも包み込んでしまふような人を引きつけるものがあるということだ。それは厳しさも優しさも含めた自然の豊かさ、良い時も悪いときも含めて人々が生活してきた歴史や文化の豊かさだ。今年度の金沢工大のCOC地域志向プログラムの見ると、心理情報学科・経営情報学科の「マーケティング調査による商店街活性化」、情報工学科・応用バイオ学科の「農業イノベーション」、全学科を対象とした「農業支援ロボット開発」など様々なプロジェクトがある。建築学生は他学科とも大いに連携し、様々な活動を経験するなかで、自らのやるべきことを見つけての恵まれた環境にあるようだ。



岩場が特徴の外浦の海\*



白米千枚田。1,004枚の棚田があり、一部は棚田オーナー制で管理されている\*

1本来るか来ないか、という地域だ。敷地の裏側には樹木が繁った小さな山が迫り、里山と里海に挟まれた風光明媚な場所である。海が荒れる冬には、海から道路を越えて激しい波しぶきが建物に襲いかかる。当時、集落には16軒の住居があり、居住者は9名、最も若い人で68歳という状況であった。「しお・C A F E」にリノベーションした既存建物を使って住居として使われていたが、近年は物置になっていて、外壁などの

傷みが激しかった。

竹内先生が研究室でこのプロジェクトに取り組むことを決めたのは、限界集落に面白いものをつくって地域を元気づけたい、というクライアントの熱意と、既存建物自体にクセがなく、学生が自由に提案できそうだったからだ。3チームによるコンペ形式とし、クライアントの「建物の外観や風景は大きくかえたくない」という要望に基づいて、それぞれがスタディを繰り返した。学生たちには、「細かくデザインするのではなく、明快なつくり方で、何をやったのかわかるような、大きなデザインをきなさい」とアドバイスした。

提案したのは、眼前に広がる外浦の海の岩場を建物内に取り込んだ「赤岩」案、建物の前後に内外の中間領域をつかった「緑側」案、建物に大きな抜けをつかった「風穴」案の3案。プレゼンテーションの日、代表取締役の中已出理さんは大勢のスタッフと一緒に現れた。そして、スタッフは全員「緑側」案が良いという意見だったが、中已出さんが選んだのは「風穴」案だった。「風穴」案のコンセプトは眼の前に広がる海と建物背



「赤岩」案



「緑側」案



「風穴」案

後の裏山の風景をつなぐということだったが、それが能登の限界集落に新しい風を起こしたいという中已出さんの思いとつながった。

コンペ終了後、コンペで敗れた学生たちがやる気をなくさないように、チームを組み直した。基本設計、実施設計と、常にコンペ状態にして、優れた案が現実になる、というかたちにした。

デザインのための調査や現場監理の作業の間、学生たちは何度も現地を訪れ、海岸や地域の抜針神社の清掃、地域の人たちを招いたバーベキュー大会などを通じて、集落との絆を深めていった。「しお・C A F E」オープンの際には、何年も神社の倉庫に眠っていた「キリコ(切子灯籠)」をカフェの敷地内に設置し、住人たちに喜ばれた。クライアントもどもこれからは集落や地域とつながり、ゆくゆくは、今は中止されている「叩き堂祭り」の復活に関わっていきたいという夢もある。「しお・C A F E」はそのスタート地点である。

金沢、野々市、そして能登半島と巡って感じられるのは、それぞれ深刻な問題を抱え



オープニングには地元の「キリコ」を立てた



工事の様子



クライアントへのプレゼンテーション